■　「平成史」の条件

この夏も、いくつか印象深いことを見聞きし、考える機会を得たのだが、その整理には多少時間がかかるかも知れない。ここでは別のことを書いてみよう。

平成も終わりが近づいてきた。今回は、「平成史」という歴史について書いてみたい。

とはいえ、ここに自分で具体的な平成史を書こうというのではない。また、いわゆる歴史社会学的な元号論を書くつもりでもない（参考：鈴木洋仁『「元号」の歴史社会学』青土社、2017 年）。

それは、「平成史」という歴史記述は、現在どのような条件のもとに置かれているか、ということである。この連載が「歴史を体感する」という試みである以上、考えなければならないことだろう。

以前にも書いたけれども、実はそもそも「歴史を体感する」というのは矛盾した試みである。「歴史」というのは人々の「体感」の外側にあるものだからだ。（大部分の人々にとって）100 年に満たない人生があり、そうした時間を軽く凌駕するスパンを背景に語られるのが「歴史」である。100 年でなくても、30 年 40 年という時間の長さとそこで起こる変化の意味を体感することは容易ではない。もちろんごく近い歴史、「現代史」や「同時代史」という試みも行われてはいるが、ここではいったん、そう措定する。

そのうえで「歴史を体感する」というのは、言葉の矛盾を突いた言い回し、いってみれば「独り相撲」であるといわざるをえないだろう。

つまりこの連載は、歴史を「体感できないもの」とまず特徴付け、それでいて歴史を「体感してみよう」と試みることで生まれる（じゃっかん無理めの）試行錯誤の積み重ねだということだ。もちろん、その無理な試みを続けることで、「私たちにとって歴史とは何か」という問いの意味が浮かび上がってくるのではないかと考えているのである。

独り相撲を続けよう。

さて、これから書かれるであろう「平成史」、つまり「平成」の歴史は、平成を生きた私たちにとって、日本史一般や近代史と違い、体験や生々しい記憶が集積する場所となる。この連載の目標からいえば逆、つまり「体感できすぎる歴史」ということになる。

そうした歴史は、数多くの体験者・証人、史料に取り囲まれている。歴史資料が希少なのではなく、ありすぎる状態である。そんな時代について誰かがひとつ歴史を書けば、必ずそれと違う経験や印象を持った人々や違うことを示す資料が次々と異議申し立てをしてくる可能性がある。読者もその時代を生きた、これをよく知る人々であるというのに、その誰に対して何のために歴史を書くのか？

刊行後いわゆる「『昭和史』論争」を引き起こした遠山茂樹･今井清一･藤原彰著『昭和史』（岩波新書、昭和 30 年刊）であればどうだったろう？　昭和が終わった「後」どころか、結果的には昭和が半分も終わっていない時期に刊行された「昭和史」である。

この新書はベストセラーになったが、批評家の亀井勝一郎はこの書物を批判し、マルク

ス主義的な歴史観によってのみ書かれているので「人間が描かれていない」とした。しかし当時の読者にとって、「人間が描かれていな」くても、それでよかったのである。読者の頭のなかではむしろ「人間」や「実感」が渦巻いていて、混乱の極みにあった。そんな彼らが求めていたのは、歴史における人間的描写などではなく、自分たちが体験した歴史的できごと（アジア太平洋戦争）に対する簡潔な説明であり意味づけであった。ある意味実感を離れていてもよく、それを否定してくれてもよかった。そこにあったのは、「人間」を突き放した歴史的な「説明」への渇望、あるいは歴史的な「必然」への要求だったといってよい。歴史が求められ、（その前提として）人々に歴史が信頼されていたということである。

そこからさらに昭和は 30 年以上続いた。

そして昭和が終わった後、いや終わる前から、「私の昭和史」という書物が数多く出版された。歴史と向き合うことが意識され、歴史への愛着は強く残りながらも、そこには「私の」という所有格がつけられ、むしろ体感や実感が全面に押し出されている。もちろんそれは、歴史を語る場が広がり、プロの歴史学者以外の様々な人々が歴史を語る場に参入したということを表してもいる。

「私の昭和史」が、「歴史」に名を借りた人生の私的語りではあっても、一人の人生をのぞき見ればそこに必ず何らかの歴史が見える、という歴史への信頼が書き手と読者の双方にあったはずで、昭和というのはそういう時代だったというほかない。

つまり、一方で『昭和史』のように「実感」を整理することを目的にした歴史が要求され、一方では「実感」から出発しつつもその「歴史」との対比関係が意識された「私の昭和史」が書かれたということである。

「私の平成史」も数多く語られるだろうか。元号が代わる来年に向け、準備している人も少なからずいるかも知れない。「特集・平成史」などの企画もいくつも用意されそうだ。

しかし、この連載の題目である「体感する歴史」との対比をあえて強めれば、（もうすでに刊行されてしまったのも含め）あまりに性急すぎる「平成史」たちは、「歴史」と銘打っていても、同時代人による単なる観察や印象記にしかならない可能性がある。

なぜなら、いま平成史を書こうにも、「体感でき過ぎる」、あるいは「体感しかできない」のだ。そうした時期にあっては、そう書いてなくても、その「平成史」の前に「私の」が隠されている可能性がある。うまく隠したのであれば見事だが、自分でも気づかないままそれをやっていれば愚鈍だ。実感と客観のあいだの緊張感のない記述は、編年体を取ってはいても、そして何らかの社会の変化を語っているものではあっても、結局のところ「ナツカシーネー」という以上の意味を持たないような類いの「歴史」（思い出？）になるだろう。

一般に、歴史家が歴史に取り組む際には、実感による予断をなるべく避け、史料批判を繰り返して事実を一つずつ確保して紡ぎあわせ、意味ある「筋」としての歴史を集成してゆくという作業をしている。だから歴史家は同時代史が苦手である。「実感」、つまり様々

な人々のリアリティに囲まれているような事象については、「事実」ひとつを確定してゆくのも、そう簡単なことではないからだ。

来たる「平成史」は、当面たくさんの人を参入させるだろう。そのための知的訓練を専門的に受けていない人々によって慌てて書かれた「平成史」たちに、歴史家が書くような歴史を期待するのは酷なのかもしれない。

さらにそこには一つ、決定的に足りないものがある。読者が持つ、歴史への渇望だ。自分の人生や体感を超えた説明や、自分の運命を翻弄している必然としての歴史は、果たしていま、求められているだろうか。あるいは、そのような読者の存在を前提にして、書き手の中に、自らの人生や体感といったものとその外部にある歴史との緊張関係は育まれているだろうか。単なる「30 年の懐古特集」が「平成史」と名付けられてしまうのなら、むしろそれこそが「平成史の条件」ということになる。

とはいえそれでも、ある時代的まとまりとしての「平成史」という歴史記述が求められることの意味を考えることは重要だろう。

一世一元のことわりのもと、近代以降の元号は、先代の天皇の死に始まり、その元号を担った天皇の死によって終わっていた。天皇が崩御することで何かの時代が終わったという感覚を持つことはあり得るにしても、何かの時代が終わり、そのために天皇が崩御するという歴史感覚はないはずだ。その区分は「天皇の死」というある種の「自然」に任され、逆にだからこそ、元号は、その煩雑さを指摘されつつも西暦と同じように、年ごとに数字が加えられてゆく、基本的に無意味な記号と扱われてきた部分がある。(近世以前であれば、元号を代えることで災厄の連鎖を止めるという意味もあったようだ)

そして無意味さの上で、そこに何かの意味、一人の天皇の在位期間を「時代」とし、何らかの「まとまり」を持たせようとして「昭和史」や「大正史」「明治史」が綴られてきた。その結果、確かに私たちはそれらに「意味」や「まとまり」を見いだしてきたのだから、そうした試みは成功していたといえるのだろう。私たちは「昭和」「大正」「明治」それぞれにイメージを持ち、それぞれに「物語」を抱く。でもよく考えてみたらどうだろう？　先ほど述べたように、それらは、ひとりひとりの天皇の（自然な）死によって区分されているに過ぎない。

「平成史」にそうした「意味」や「まとまり」を見いだすのは、今後の（広い意味での）歴史家の仕事だ。それには期待したい。先述の通り、歴史を必要とする（／しない）読者との関係もある。歴史家は「平成史」の読者をどのように想定することになるだろうか？

ともあれ、実感や予断と緊張関係を持ちながら、平成もまた、ゆっくり「歴史」になってゆくだろう。それが進んだなら是非、(そのときまでこの連載が続いているとは思えないけれども）どこかよそよそしい「歴史」になってしまった平成史を、再び「体感」しようと試みることにしたい。

ただ一つだけ、書いておきたいことがある。平成の「終わり」に、天皇自身の意志が働いたということである。そして、ひとつの元号が終わる一年以上も前に、その「猶予」を

得た。ここが引っかかる。

　その社会的な意味は何か。それは結局、今上天皇による、「元号をまとまりの単位にした歴史を綴り、共有すること」に関する重要な謎かけになっているようにみえる。来年以降賑やかになるであろう「平成史」たちのなかで、こちらについても考え続けてゆくことにしたい。